

入門講座

- *総合司会 たましろの郷 施設長 花田 克彦
*総括支援アドバイザー 社会福祉法人東京聴覚障害者福祉事業協会
理事長 南宮 由和
社会福祉法人東京聴覚障害者福祉事業協会
理事 杉山 行利

<講座 1> 「現在の特別支援教育の現状」

- *パネラー 特別支援学校（小 1）の母 大久保 正子
ろう学校（小 6）の母 竹原 愛
ろう学校（中 2）の母 平田 由佳
特別支援学校（高 2）の母 鈴木 淳子
ろう学校（高 3）の母 松崎 めぐみ

花田：現在特別支援学級等に通っている子供のお母さん達 5 人に無理を言って来ていただいた。ろう学校か特別支援学級のどちらが良いかではなく、それぞれの良い部分、困っている点などを親の立場から本音を話してほしい。それから元教員のお 2 人からも話を聞きたい。

小学校、中学校、高校のお子さんそれぞれいる。幅広い立場からお子さんの障害の状況、将来のこと、困っていることなどを時間は気にせず話してほしい。

【特別支援学校で学ぶなかまの家族】

大久保：娘はダウン症、新生児聴覚検査で聴力がないと分かる。退院後耳鼻科で検査をして、生後 8 か月からろう学校の乳幼児相談に通い始めた。だが聴神経が細く、今後聞こえるようになる可能性はないと言われた。人工内耳は無理、手話が必要だと 2~3 歳で自覚した。

ろう学校の幼稚部には「歩ければ入れる」と言われたが、その年は定員オーバーで入れず 2 歳で 1 年間保育園に通う。夫は会社を退職して自営業に変わり、娘の送迎をした。ろう学校の幼稚部に入れなかった重複の子を月 1 回集めて開かれる「ことり組」に入った。年長の時もやはりろう学校には入れなかったので、小学部を目指した。第一希望はろう学校、第二希望は特別支援学校だった。

就学相談の時に担当から特別支援学校の方がよいと言われたので、ろう学校は無理なのかなと思った。娘は発達がゆっくりで、手話よりも生活の面をしっかりとの方がよいと言われ、悶々とした日々を過ごしていた。そして旭出学園のマカトン教室に娘と一緒にいった。やはり娘には個別の対応が必要と感じた。受け入れると言ってくれるところがいいだろうと判断した。都の教育委員会の相談で出

来れば手話ができる先生、視覚支援をお願いしたいと伝え、特別支援学校に方向転換した。さらに放課後はクラブかたつむりに通い、手話の環境にしたいと考えた。

特別支援学校の入学式では、ろう学校のことり組でお世話になった先生が担任と分かった。手話ができる先生もいて、障害の重い子3人の重複クラスになった。兄弟は子供手話教室に連れて行き、家で「欲しい」「美味しい」など簡単な手話や写真やカードを使って会話をした。最初はなぜろう学校に入れなかったのかと悶々とした気持ちだったが、今は解放された。先日、娘がかたつむりで積極的に遊ぶ姿を見てよかった。感謝の思いだ。

【ろう学校在学児の家族】

竹原：息子は小6で自閉症、難聴、知的の障害がある。手をたたく音などは分かる。こちらを見てほしい時は手をたたいて音を出すと振り向く。コミュニケーションは手話。口話は分からない。ろう学校の乳幼児相談から幼稚部へ進み小学部では指文字を習い、長い会話は出来ないが知っている単語での会話は出来る。息子からの要望は手話で伝えてくる。スケジュールなどは①学芸大学へ行く②電車に乗るなど数字とひらがなで分かりやすく書いて伝える。漢字は少し分かるので理解出来る。行きたい場所の名前をすべて覚えるのは難しいので、iPadに入れてある公園などの写真を選んで行きたい場所を指さす。

ここまでコミュニケーションが取れるようになったのはろう学校のおかげ。「もう1回」という手話が出来ず1年半くらいでやっと出来るようになった。重複ではない子はすぐに出来るようになるので、こんなに出来ないということが衝撃だった。だが、ゆっくりでも少しずつ出来るようになった。

外に行きたいときは「靴下」と手話で表す。単語1つで自分の気持ちを表現。その単語が今も増えている。指差しも出来なかったが出来るようになった。ジグソーパズルを使い1つだけ抜いておき、足りない所はどこか指差しをするなど色々な工夫をして繰り返し練習した。そして半年で指差し出来るようになった。

幼稚部2年の時にまず「やりたい」は出来た。だが「いやだ」がなかなか出来なかった。怒ったり泣いたりしていた。「いやだ」が出来るようになってほっとした。「いやだ」という気持ちが正しい形で伝えられるんだなと思い安心した。

小学部1年で単語と文字、手話指導、指文字も覚えた。友達の名前も出来る。自閉症なので会話は多くない。伝わってはいるがキャッチボールではない。

今は進路について悩んでいる。先生からはろう学校ではなく特別支援学校が向いているとずっと言われた。単語だけなら「手話」ではなく「サイン」と言われた。ろうの子と会話できてないからろう学校は無理と言われた。「手話は学校ではなく家でやって」と言われた。「お子さんはろう学校では主役になれない。ろう

学校重複学級は知的で軽い子が対象で定員枠もあるので難しい。お子さんは少し重いですよね」と言われた。色々な面で少しでもコミュニケーションが楽になればと手話を教えてきた。もっと手話を吸収できるのに手話を奪うようでショックだった。先生もそう思っているのかと思うととても残念。先生の言い分も分からない訳ではない。長い会話は分からないので、どちらがよいか悩んでいる。特別支援学校の方が寄宿舍もあり社会性や自立の力が付く。旭出学園にはマカトンがある。先生が指文字を理解している。高2の時に寄宿舍で1ヶ月生活する。視覚支援も充実している。社会性、自立が身に着く。ろう学校では我慢する時間が多い。それにここまでろう学校には向いてないというようなことを言われると、不安な思いが強くなってしまった。でも息子から手話を奪うような状況になってしまってよいのだろうかと考えてしまう。

【ろう学校か特別支援学校かで悩む家族】

平田：息子は中学2年、7か月頃から補聴器使用。重度難聴。自閉症、知的障害がある。

コミュニケーション方法は手話、指差し、写真。本人からは買い物行きたい、ジュース欲しいなど。こちらからの話は分かるが難しい内容の話は理解出来ない。学校からは「中学2年の間に高等部はろう学校に行くのか特別支援学校に行くのか進路を決めるように」と言われている。特別支援学校には、小学から中学に上がる時にも見学した。その時「手話の上手な先生がいるからという理由では決めないでほしい」と言われた。その先生がずっといるともかぎらない。ろう学校からは「将来の就職の面から考えると特別支援学校の方が有利」と言われた。そこまで言われると「ろう学校を出て」と言われているように感じる。

ろう学校の利点は聴覚障害だけの子と一緒に過ごすこと。「廊下を走ってはいけない」とか遠慮なくはっきりと注意してもらえる環境はよい。難しい行事の中で息子が出来ることを見つけて取り組ませてもらえるのは有難い。自宅から遠く送迎が続けられるか不安はある。母の体力的に心配。簡単な発声練習をさせてほしい。だが手がまわらないらしい。悩むのは、私が「自立の為にこれをしたらどうか」と言うと、「息子の発達にはまだ難しい」と言われてしまう。では、学校としてはどうしたいのか時々分からない状況がある。

【ろう学校から特別支援学校への転校生家族】

鈴木：神奈川在住なので制度の違いがあるかもしれない。息子は高校2年、聴覚障害2級、療育手帳A1、どちらも重い等級。小さいころから県立医療センターにかかっており、そこで聴覚障害と分かる。赤ちゃんから補聴器を使用し努力した。地域の保育園卒園、療育センターに通う保育園で職員が障害者1人に付いた。療

育センターでST(言語聴覚療法)を受け、ろう学校で乳幼児相談にも通ったが、周りの子と違った。他の子は手話を覚えていくがうちの子はなかなか覚えず赤ちゃんの状態。じっとしてられない。親子共に苦しい思い。幼稚部面談ではろう学校から遠回しに断られるということもあった。

隣の市のろう学校に相談したらと友人に勧められて行ってみた。校長が「聴覚障害の教育を受ける権利があるから」と教育委員会にかけあってくれ、市は違うがろう学校に入学出来た。コミュニケーションの手段が増えるので少し遠いが私も子供と一緒に手話を学ぶ為に小学部に通った。ろう学校は生徒数が少なくマンツーマンで教わることが出来た。先生は養護学校から来た。ろうの先生も付いてくれた。じっくり丁寧にケアしてくれた。

療育センターでは息子は補聴器を嫌がった。先生からも補聴器は諦めましようと言われたが、ろう学校は周りの子が補聴器を付けているので影響を受けて少しずつ付けるようになった。諦めないでよかった。

5年生の時に重複のクラスができた。一人ひとりに合った丁寧な授業で卒業旅行も楽しいことは何だろうと考えてくれた。交通機関も無理のないように計画をした。贅沢なくらい思い出に残るものになった。息子は模倣することはなかったので、残念ながら手話を身に付けることは出来なかった。卒業後社会に出てからのことを考え、親が勝手にここがいいと決めるのではなく、地域に戻って考えることが必要だと思った。とても悩んだ末に、中高6年間は地域の特別支援学校に通った。その中学校の入学面談の時に「聴覚の専門的な特別な指導は出来ませんがいいですかお母さん」と言われ、「はい、いいです」とは返事できなかったが、学校の方針に従った。仕方ないと思い向き合った。

一番の違いは今までは遠くまで送迎していたが、特別支援学校にはスクールバスがあった。親の負担はかなり減った。生徒が多く先生は忙しいので、息子を送った後先生と話す時間などない。少し寂しいが、年に数回ある面談の時に先生と話をした。

補聴器がハウリングした時はろう学校では先生が見てくれた。今度修理しようとか言ってくれた。特別支援学校では、補聴器は高価なもの。本人が管理出来ない場合は困ると敬遠されてしまう。でも授業中は付けた。ろう学校では補聴器を嫌がったこともあったが特別支援学校では不思議なくらい付けた。

息子が中学1年の時に夫が亡くなった。その時は学校を地域に戻していたために救われた。近くの学校だったので葬儀の打合せ等があっても送迎も間に合った。喪主として葬儀など色々なことがあったが、先生が3人態勢で来てくれた。子供を見てもらえた。とても助かった。私が緊急入院で手術したこともあった。息子を置いて救急車に乗ることは出来ないが、放課後デイの方が事前に私の様子に気づき自分の連絡先を教えてくれていたので連絡をすると、朝6時に来てくれた。

息子を自宅でみてもらい、私の衣類の準備までしてくれ救急車で病院に向かうことが出来た。手術の時も放課後デイの方が地域と連携を取るなどしてくれ、「安心して手術してください」と言ってくれた。無事に手術が終わった。その間息子も初めての所で荒れることなく、私がいなくても安定して過ごし、お見舞いにも来た。大人になったなと感じた。

ろう学校でも先生に恵まれたが、これから将来のことを考え地域と結びつけることの重要性を感じる。大人になって地域で生活していくことを考えた場合、地域から離れるのはとても怖い。やはりこういう子がいるということを一人でも多くの人に知ってもらい、地域の人に理解してもらうことが大切。そして必要な支援を受けること、横浜市の支援を最大限に活用できる体制を取っておくことが重要。これが親としてしておくべきことだと実感した。

最後にどんなに重い障害を持っていてもやはり心がある。うちの子は言葉も話せない、手話も出来ない。でも本人は一生懸命メッセージ伝えている。息子だけの言語かもしれない。でもその特別な言語を受け止めようと思えたのは、ろう学校時代に手話と出会えたから。だから今まで歩んできた道では多くの財産が出来た。私としてもよかった。今後は地域の方々と連携して息子の将来を一緒に考えて力を借りていこうと思っている。

【ろう学校在学児の家族】

松崎：娘はダウン症。生後すぐの検査で左耳が聞こえないと分かった。片耳難聴と言われ、当時は何のサポートもなかった。「片耳が聞こえるのでダウン症の子として育ててください」と言われた。左耳難聴の場合、右耳が聞こえる場合は何もサポートが受けられない。ある日市内の発達センターや療育に連れていっていた。3歳で他の子供の様子を目で見てから後をついていると指摘され、ABR（聴性脳幹反応）の検査をしたところ、右も補聴器が必要なくらい聴力が下がっていると分かった。4歳から補聴器使い始めた。同時に立川ろう学校の療育相談にも通った。途中からでも幼稚部に入れなにか聞くと「重複学級はいっぱい聴力障害の軽いお子さんはうちでは受けられない」と言われた。1ヶ月に1回だけの教育相談を受ける日々が続いた。

地域の小学校の特別支援学級を考えていたが、「補聴器の管理が出来ない」とはっきり言われた。補聴器がないと音が聞こえないのに、補聴器の管理は地域の小学校では責任が持てないと言われた。こちらから聴覚障害の子を受け入れますよね？と聞くとその子達は自分で補聴器を管理していると言われた。

ろう学校は重複の子は無理なんだなと思った。そこで特別支援学校に見学に行ったが、そこは音が多過ぎた。娘は補聴器を付けると色々な音を拾い過ぎて補聴器を付けられなくなるほどだった。でもやはり補聴器の使い方を身に付けてほし

かったので立川ろう学校の就学相談に行った。担当者から「両親、姉は聞こえませぬ。その環境で手話は覚えられないと思います。」と言われた。「ダウン症で小学部に入学して中学部、高等部に進んでいるお子さんはいませんよ」とも言われたが、それでも主人と相談してやはりろう学校で育てたいと願い最後まで頑張った。保育園の卒園間近でようやくろう学校入学が決まった。放課後は今と違って親の会がかたつむりをやっており、週に1回通った。そこで立川ろう学校の中学部、高等部の先輩などから手話を習い、手話ができるボランティアさん達に可愛がってもらいとても幸せな6年間だったと思う。

中学部まではスムーズにろう学校に通えたが「高等部は無理だ」とはっきり言われた。「聴覚障害者手帳6級、知的の方が重いので、高等部を卒業後は知的障害の作業所に通うことになる。そこで手話のない世界に飛び込まなければならなくなる。だとしたら少しずつでも手話のない環境に慣れた方が良いのではないか。」と言われた。色々な人に相談した。でも娘がやっぱり立川ろう学校がいいと決めた。親としてもそれを尊重し、高等部に入学した。重複学級は4クラスで幸せな生活。でも重複の子にはろう学校の高等部はとてもきつい面もある。行事や部活は普通級の子と一緒にいる。お客様状態になることが多い。友達が先生以上に上手にサポートしてくれた。PTA会長という立場から色々様子を見ることが出来た。先日は東京都が決めている宿泊防災訓練があった。学校に泊る。学校が好きだが夜の学校は怖いらしい。トイレも暗い。真っ暗な中で食事をしたり、消防署担当が来て行うAEDの体験の時に戸惑っていると、友達がサポートしてくれたりしていた。やっぱり一緒に小1から11年間育ててきたなかまだなと感じた。

一人通学の練習も始めた。友達とは通学地域が違う。国立駅までは同じ所まで帰ってくるのでそこまでは一人でも帰ってこられるようになった。バスでの通学を色々な方にサポートしてもらった。

あと約1年後には大好きな立川ろう学校を卒業して社会に出る。実習が始まっているが実習先では手話を使う人がいない。本人は聞こえないが喫茶で働きたい。障害者が働ける喫茶で働きたいと以前から希望している。どのような実習になるか心配はあるが娘がそれを乗り越えて通えるところが決まるとよい。

将来的にはたましろの郷ほど大きくななくてもよいので、グループホームで同じような仲間と手話を使いながら生活出来るような社会になってくれるといいと思う。

立川ろう学校や都内のろう学校について話すと、2年前から立川ろう学校は幼稚部に重複の受け入れを止めている。現在小学部に4学級、中学部に1学級、高等部に4学級で合計9つの重複学級がある。東京都が決めた数。そこから溢れた子もいる。小学部は大丈夫。中学部は1クラス3人のところ2人は多い。高

等部は3人のクラスが4クラスで12人の所16人いる。ただ高等部はコースが2つ分かれている。就労先も違う。授業の内容も違う。就労自立コースは知的の障害は軽い。社会自立のコースはB型就労施設を目指す。

都内には4つのろう学校がある。その中で重複学級があり幼稚部から高等部まであるのは西にある立川ろう学校、東にある葛飾ろう学校。2校だけ。真ん中にある大塚ろう学校には重複学級があり、分教室もあるが幼稚部と小学部しかない。中学部以上は特別支援学校に進む子が多い。中央ろう学校は中高一貫校で大学進学を目指している。重複は入れない。私立では明星学園、日本聾話学校がある。明星学園は以前行った時に「日本手話で指導するので重複の子は難しい」と言われた。日本聾話学校は中学部までしかないので高等部は立川ろう学校に行く子も多い。重複か普通か2つのコースのどちらかを選んで進む。

今一番心配なのは、重複で医療ケアの必要なお子さんが増えている状況。ろう学校の幼稚部は歩行が出来ていないと難しい。立川ろう学校は昨年度から看護師が常駐している。小学部に医療ケアが必要なお子さんがある。医療ケアが必要なお子さんは送迎が必要。スクールバスには乗れない。朝は看護師がバイタルチェックをしてから預かり、帰りは看護師と会ってからでなくては帰れない。つまりかたつむりに行かせたいと思っても親が一度学校に行かなければならない。その点が中学部、高等部に上がってからの不安につながっている。小学部のお母さん達の悩みだ。他の学校ともう少し連携が取れるといい。出来れば関東や全国の重複学級の様子を知りたい。

5年ほど前からダウン症協会に入っている。その中に「青い船」というダウン症と難聴児のグループがありそこで相談員をしている。ろう学校に通わせたいけど県内に1校しかないなど地域の問題ある。福岡の方で小学部の間だけろう学校に通わせたいと高速を1時間かけて毎日送迎している人がいる。中学部は地域に戻さなくてはならないと思うが今は後悔していない。1回はろう教育を受けさせて良かったと言う。もう少し多くろう学校があったらいいという意見などがある。

今立川ろう学校にいるが、3年後には東京都の第3次計画で知的障害部門と聴覚障害部門の合併が決まっている。寄宿舎とプールが更地になっている。ここに知的の子達が来てグラウンドを一緒に使う日が来たら一体どうなるのか？色々な疑問がある。その辺も卒業してOBになってからも関わっていききたい。

花田：ろう学校が将来どうなっていくのかと心配がある。

二人のろう学校の先生の話を知りたい。今の話の中でパネルディスカッションでも出たかたつむりは昔は作業所だった。今のかたつむりとは何なのか。東京では作業所が出来て30年経つ。今から32、33年前に学童クラブが出来た。かたつむりで何をやっているのか話してください。

藤江：クラブかたつむりの職員です。

6年前に法人に入ってから開所日が週4日に増え、現在利用登録をしているなかまは45人。制度が変わってからは重複だけではなく、ろう学校の普通クラスに通っているなかまも増えた。現在登録者の約7割が重複。なかまが増えればなかま同士の関わりが自然と増える。小学生から高校生までいるので、小学生がいたずらやケンカなどをすると、上級生が「何をしたの？誰がやったの？」となかま同士で話し合いが始まることもある。

また自分が出来る表現で気持ちを伝えようとすると、どうしても怒ったり叩いたり泣いたりという伝え方のなかまもいるが、友達との関わりの中で少しずつ言葉を覚えている。そのような成長を長い目で見られることが楽しい。

【総括支援アドバイザーから】

南宮：全国のろう学校の校長会が調査した学校基本調査資料がある。29年度資料。乳幼児相談0～2歳、ほとんどの人が経験している。立川ろう学校には乳幼児相談専門のコーナーがある。乳幼児用の図書、和室、調理する所、お母さん達と話す所がある。乳幼児教育相談の重要性が非常に高まった。

先生の定数というものがあるが、それに乳幼児教育相談の担当は含まれない。各学校でやりくりする。幼稚部に1、定年退職した先生サポート1、重度の学級は普通学級よりも人的な手当が高い。それをきちんと守ると高い。教員の数を増やす必要あるがお金もかかる。教育委員会はその枠の中で1年間の学級数を決めている。だから増やしたくても増やせない。教員の中にジレンマがある。どこに相談に行くべきか悩む。ろう学校だけでなく特別支援学校でも同じ問題かかっていた。

資料に0～2歳が全国ろう学校96校（前は108校）、乳幼児教育相談をうけている数が822人、幼稚部が全国で1096人、幼稚部のうち重複は131人いる。小学部1842人のうち452人が重複、中学部では1165人のうち262人が重複、高等部は1406人のうち267人が重複、つまり全国で1112人の重複の幼児、児童、生徒がいる。

ろう教育の中で、この子供たちの教育を保障していくことが非常に大切。私は34年間ろう学校で教師をしていたがそう思う。

今うちの法人でも相談事業を始める動きがある。専門のスタッフを置いて行う相談を進める必要がある。卒業後について、母親として、家族についてなどさまざまな問題がある。法人の事業として考えている。今ろう学校で乳幼児相談は別。5700人の子供がいる。1万2000人を超えた時もある。繰り返しですが1112人の重複のお子さんがある。その事実、重みを是非皆さんに感じ取ってほしい。継続は力だと思う。色々な乗り越えなければならぬ壁はあるが、初めてたましの郷に行ったときのなかまの様子と今は全然違う。集団の中でけんかをする、

保障された集団のなかで子供達は育つというのが基本だと思う。子供の無限の発達、そして発達は途切れることはない。

花田：では杉山先生お願いします。

杉山：ここに平成 16 年 11 月作成の東京都教育委員会の特別支援教育の資料「一人ひとりが輝く特別支援教育の創造を目指して」がある。実際にはもっと多いはず。実際の数が分からない。今は特別支援学校に行っているのが不明。実際には 3000 人くらいいるかもしれない。お金を使わない特別支援。一番の狙いは何か？普通の小、中学校に通っている障害を持った子ども達が卒業後、進路の問題で困っている。高等部の特別支援に沢山入ってくる。私も特別支援のコーディネーターをしていたので、授業の様子をみたことがあるが、やはり騒がしい様子。元気がいい。それに対するケアを今の障害児学校の枠の中で行うことは無理がある。

もうひとつ一番腹立たしいのは、特別支援学校がいいというのは誰が決めるのか？その子の将来の成長や発達が誰に分かるのか。松崎さんの話に「特別支援学校に行けと言われたが頑として私はろう学校に行く」という話があったでしょ？娘さんが希望したんでしょ？そうです、自分で決めるという権利を持つ、両親だけでなく自分で決める権利を持つということ、その為に頑張りましょう。PTA 会長や親の会で訴えていくことは必要。自分たちの権利意識を持ってください。子供の実際の状況に合わせない教育の枠は認められない。結果がどうであれ言うべきことは言うべき。不満だということを訴えることは大切。親しか言えないことがある。手話が出来る先生がいても異動したら誰もいなくなる。「だったら手話の出来る先生を育てろ」と言いたい。

特別支援教育の資料に「どういう子供が入ってきても対応しろ」と書いてある。先生たちも応援してくれないしやっても無駄な面もある。でも先輩がいる。親というのは自分の子供はどんなことをしてでも守る。

花田：親の力がなければ我々の運動もうまく行かない。タイアップして初めて実現する。

今日の話は大切に受け止めてこれからの運動に結び付けたい。何か言い足りないことがあればどうぞ。

松崎：学校では毎年良い先生にあたれば良い 1 年が送れるという状況。娘が中 3 の時、先生が変わったのか思春期なのかストレスのせいかわかると自傷行為が激しくなり親として見ているのが苦しいほど。自分を傷つける行為が止まらない。それは周りに自分を理解してくれる人がいない、コミュニケーションがうまくとれない問題もあったと思う。

本当にもうすぐ卒業だが、出来ればよい先生に当たったからラッキーな 1 年が送れるというのではなく、重複に合った先生に教育を受けられるような人員配置をしてほしい。親は遠くても通っている。遠くてもここに行けばきちんと子供

に合った教育が受けられる、きちんと向き合ってくれる、目を見て人として気持ちを伝えられる先生がいる。そんな場所がほしい。

杉山：先生方も色々あると思う。でも先生方は子供が好きなんです。子供の成長を望んでいる。それは共通。それを大事にしてほしい。先生を育ててほしい。今の先生は本当に忙しい。でも子供のことを考えるということは忘れていないと思う。そういう立場で見守ってほしい。

Aさん：私は静岡県の富士山の麓に住んでいる。子供はろう重複。かたつむりに5年ほど通っている。土曜日に月3回新幹線を通っている。息子は中2で特別支援学校に通っている。皆さん色々と苦しい言葉を言われて心に残っているんだな、私も同じく苦しい言葉を言われてずっと心に残っている。でも皆さんそれを乗り越えて工夫してやってらっしゃる。同じこどもを持つ親として嬉しいなと思った。

手話の出来る先生を付けて欲しいと特別支援学校に入る前から県の教育委員会にお願いして、毎年何人かの先生が付いていた。高校は義務教育ではないが、県や学校の先生にお願いしていこうと思う。障害者差別解消法があるが、その中には出来るだけ本人の希望に沿う義務がある。すごく大変だが一人でやらなければならない。その法律をかざして今から県や学校にかけあう予定。だがこんな方向でよいか。やり続けてよいか。

南宮：義務教育でないからという理由で断ることは出来ない。静岡県にもろう協がある。手話言語条例もある。細かくどのように導入するかなど再度よく確認して、武器にして行動する。使える手は沢山使う。地域のろう協と相談するとよい。

花田：当事者抜きではなく、当事者を大切にすることが大事。

今日の内容はとても重い言葉が沢山あった。今後の施設の運動にも結び付けたい。